



編集月旦 2013年12月号(年鑑)

★異次元の金融緩和による「アベノミクス好況」で、今年はおカネが回って景気のいい人たちがいます。が、外からは見えない心のうちに動くもの、その方向からこの国の将来は見えてきません。

☆この国に繁栄をもたらすもの。それは億兆円をこねまわすマクロからの方法ではなく、ワンコインをたいせつにし、力を合わせてみんなで築き上げるもの、民衆の「和」の結実です。その心の内に息づいているのは、格差をなくし、みんなで豊かになろうとする気概。つい先ごろ1980年ころまでだれもが保持していた「和（平和・協和・調和・総和・・・）の心」を思い起こせばわかることです。

☆高齢者のわれわれは「アベノミクス」から何か恩恵を受けましたか。恩恵なく、格差だけが広がっていることに気づいています。安倍総理は女性と若者の成長力を強調しますが、現実には「支える側にいる現役シニア」の潜在力を黙止しています。そのうえ中韓両国から「歴史から学ばない」として非難され孤立しても、軍国化に進もうとしています。政治の側が「歴史から学ぶ」ことをオープン・フォーラムとして実践している藤井裕久氏の発言からは学ぶべきものがあります。

☆一過性の「アベノミクス好況」が失速する時、国難を乗り切る活力は、黙止されながらも高齢者が展開する「成長＋成熟社会」形成の活動のほかにはありません。それは65歳になった戦後っ子「団塊の世代」を加えて3000万人（25％・4人にひとり）に達したわれわれが展開する新たな「歴史をつくる」事業です。

☆新たな「歴史をつくる」事業、それは「高齢化時代」を体現して暮らしている高齢者による「平和な長寿社会（高齢社会はその証）をみずからの手でつくる」事業です。具体的には国防（平和を守る）意識の醸成を国防軍に頼らず「地域に根差した国民運動」でおこない、国際的に孤立しないこと、冷静な世論をつくること、格差をつくらないこと、次世代を養育すること・・・などが基本です。

☆「地域に根差した国民運動」というのは、だれもが住みやすい地域社会「特性を活かした地域づくり」です。その国民運動が、国（地域）を護る意識を醸成し、平和の礎を築くことになります。高齢者が保っている「知識・技術・資産」（高齢者の3本の矢）を活かした地域社会の形成は「平和の証としての高齢社会」の形成でもあります。高連協「高齢社会フォーラム」での樋口恵子・堀田力両代表の発言・提案も「地域へ」を呼びかけています。とくに樋口さんの基調講演は充実した内容をたたえています。ぜひご一読ください。かつて若い日に草の根の「安保ハンタイ！」運動に参加したみなさんもまた、各地で高齢者として再び社会参加する姿が思われます。世代を越えたこの新たな国民運動「だれもが笑顔の長寿社会」事業なら、他国から非難されるどころか称賛を受けることになります。

★そして2014年は、1999年の「国際高齢者年」いらい15年、福祉（ケア）を中心に活動を支えてきた「高連協」（1999年に「高齢者憲章」がある）をはじめとする民間団体が、国連の高齢者五原則である「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」を掲げ、新「高齢社会対策大綱」が要請する「人生90年時代」への意識改革としくみの形成をめざして全面的な活動を活発化する時期でもあります。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受する「アジアの共生」は、ともに平和の証であり日本高齢者の課題であり本誌の目標です。（編集人 記）

